

ルヌヴィエの現象主義をめぐって

* 川 崎 惣 一

要 旨

本論の目的は、19世紀フランスの哲学者シャルル・ルヌヴィエが「現象主義」という考え方のもとで展開している議論の枠組みとその論理とを明らかにすることにある。

「現象主義」においては「認識を諸現象の諸法則に還元すること」が目指される。この「諸現象の諸法則」とは、経験とともに見出されるがそれ自体は経験に先立つような、カント的な意味でのアприオリなもののことであり、ルヌヴィエはこの意味での「法則」を「カテゴリー」とも言い換えているが、この「カテゴリー」は彼の哲学を特徴づける概念である。

ルヌヴィエは一貫して私たちの認識を超越した「絶対的なもの」を批判し、実体や無限といった概念を形而上学的として厳しく批判する。彼は認識可能なものをすべて「表象」として捉え、これが関係的な構造をもつと考える。「表象」はルヌヴィエの「現象主義」の核心をなす概念である。そして諸現象は「表象」という関係の構造をそなえており、いくつかの「カテゴリー」に従って私たちに与えられるのだ、と彼は規定している。

Key words : 新批判主義, 表象, カテゴリー

はじめに

本論は、19世紀フランスの哲学者シャルル・ルヌヴィエ (Charles Renouvier, 1815-1903) が自らの思想的な立場として称した「新批判主義 (néo-criticisme)」の、とりわけその根幹をなす「現象主義 (phénoménisme)」と彼の呼ぶ考え方について論じる。そして本論の目的は、ルヌヴィエのいう「現象主義」の内実を、「表象」、「法則」および「カテゴリー」というルヌヴィエ哲学の根幹をなす諸概念のオリジナルな規定を明確にすることによって、彼の議論の枠組みとその論理を明らかにし、彼の哲学の根本的な発想を明確にし、さらなるルヌヴィエ哲学の研究に資することにある。

上記の概念はルヌヴィエ哲学の根本諸概念であることから、その解明に取り組んだ研究はすでに存在する。初期のものとしてはたとえば Séaille (1905) などがあり、近年では Fedi (1998) が比較的良好に知ら

れている。にもかかわらず本論が改めてこうしたテーマを設定するのは、今後さらなるルヌヴィエ研究を進めていくことを念頭に、一見すると非常に体系化されているように見えて、実際にはかなり錯綜しているルヌヴィエ哲学の全体像をつかむ上で、彼の記述に丁寧にそくした仕方でこれらの概念について明確な規定を与えておくという作業が不可欠だと考えられるからである。

ルヌヴィエは19世紀後半のフランスを代表する哲学者であり、アンリ・ベルクソンにも影響を与えた。また、ウィリアム・ジェイムズが「ルヌヴィエの自由論によって救われた」という趣旨の言葉を書き残していることがよく知られている⁽¹⁾。このほか、フランスの第二帝政から第三共和政の時代にかけて、共和主義の論客として個人の自由を重視しつつ独自の「連帯」概念を唱えた政治思想家としても重要である⁽²⁾。しかし、その知名度に反して、彼の思想・哲学は日本国

* 教科内容学域 人文・社会科学部門 (哲学)

内においてまだほとんど研究されていないのが現状である。

ルヌヴィエの哲学を特徴づける仕方には様々なやり方が考えられるが、そのもっともオーソドックスな説明は、19世紀フランスにおける新カント派の代表的な哲学者であり、とりわけ「新批判主義」の学派の創設者、というものだろう。彼は19世紀前半のサン＝シモン主義および実証主義の影響を受けつつ、筋金入りの共和派の論客でありかつ在野の哲学者として、第二共和政から第二帝政期を中心に、哲学的な論文・著作だけでなく、政治的な論文やパンフレット等も含めて多数の文献を執筆し、精力的に発表し続けた。

ルヌヴィエの哲学の中心テーマは自由の問題であり、彼が人間において注目するのは意志であり、彼の考える政治の根拠とは個々人の自由および道徳である。彼がこのような発想をとるに至った背景には、とりわけ18世紀以降、実証的な諸科学が著しく進歩したことを受け、そうした科学的な観点を他の学問分野に応用しようとする動きと、そうした動きと軌を一にして広がりつつある決定論的な見方に抗して、人間に備わる自由を強く主張し、この自由に基づいた人間観を確立しようとする強い決意がある⁽³⁾。本論では自由に関する彼の思想に触れることはできないが、彼の哲学的な思考のベースにこの自由の問題があることは、つねに念頭に置いておかれるべきことであろう。

と同時に、先にも述べたように彼が「筋金入りの共和派の論客」であったこともまた、彼の哲学的な立場に大きく影を落としている。この点については、北垣(2005)が彼の道徳論に関して述べていることが参考になる。すなわちルヌヴィエは道徳に関して、カントが叡知界と現象界とを区別して道徳法則を前者と関連付けて論じているのを批判し、あくまで実践の場面で取り扱おうとするのだが、この背景として、「当時の政治的状況において、カトリック勢力に対抗せざるを得ない共和派は、超越的な契機を回避して、世俗的かつ内属的なかたちで道徳を基礎づける必要に迫られていた」(北垣 [2005, p.53]) という事情があったというのである。この点は、本論で明らかにするように、ルヌヴィエが実体や無限といった絶対的なものを想定することを強く批判する姿勢と軌を一にしている。

なお、ルヌヴィエの遺した著作・論文等にはかなりの分量があり、かつ、その記述は必ずしも明快とは言

えないため、彼の哲学・思想の全貌を明らかにすることは多くの労苦を伴う。この点も含めて、本論では彼のいう「現象主義」にもつばら焦点を当てるが、本論での分析は今後のルヌヴィエ研究の足掛かりをなす予備的研究という意味合いももつ。

1 新批判主義とは

「新批判主義」という呼称はルヌヴィエ自身が自らの思想を表すために用いている呼称であるが、この言葉には、カントの批判哲学を継承しつつさらにそれを徹底させるという意図が込められている。彼は主著『一般批判試論』(1854～1864年、全4巻)のなかではっきりと次のように書いている。

「私はカントを継承しているのだとはっきりと認めておく。そして、熱望というのはよいものであり、自らの思想をあえて公表する者にとって必要なものなのだから、私の熱望とは、ドイツでは頓挫した批判の仕事フランスにおいて真剣に継続することだ、ということになるだろう」(Renouvier [1912a, p.XV])。

このようにルヌヴィエは、カントの批判哲学を受け継ぎ、さらにそれをカントよりも先に進めることを自らの課題として設定している。

他方でルヌヴィエはまた、自らの議論の内に、彼自身が若い頃に強い影響を受けたコント流の実証主義の考え方も取り入れようとしており、これが彼の思想のもう一つの特徴をなしている。

「私はここで、実証主義学派の一つの根本的な定式を受け入れることを宣言したい。それは、認識を諸現象の諸法則に還元すること、これである。この原理を、私はつねに用いるはずであるが、この『第一試論』の大部分は、認識そのものの分析によってこの原理を打ち立てるためにささげられる。またこの原理は、カントが形而上学の伝統に煩わされて、十分にはっきりと展開したり従ったりしていないとしても、カントの方法に一致すると考える」(Renouvier [1912a, p.XVII])。

この箇所では、「新批判主義」が「認識を諸現象の諸法則に還元すること」を目指すものであることが明言されている。しかし注意しなければならないのは、ここで言われている「諸現象の諸法則」というのが、〈諸経験をもとに帰納的に導き出される一般的な規則的關係〉という以上の強い意味合いをもつもの、つまり、たしかに経験において機能しているのが見出されるが、それ自体は経験に原理上先立ち、諸現象を規定していることが見出されるようなものとして理解されている点である。すなわち、彼が述べている「諸現象の諸法則」とは、経験とともに見出されるがそれ自体は経験に先立つような、カント的な意味でのアプリアリなもののことなのである。後で述べるように、彼は別の箇所でこの意味での「法則」を「カテゴリー」とも言い換えているが、これらは「新批判主義」の特徴をなす概念である(4)。

さらに、「新批判主義」に関してもう一つ重要なことは、ルヌヴィエが一貫して私たちの認識を超越した「絶対的なもの」を否定し、したがってまた実体やそれに類するものの概念を形而上学的として厳しく批判している、という点である。彼の考えでは、世界とは、私たちに「諸現象」として与えられる世界のことであり、彼はあくまでこの点にとどまろうとする。

ルヌヴィエにとって、現象を超えたところに実体ないし絶対的なものを想定することは端的に誤謬である。そうしたものを想定するような考え方とは、たとえば次のような形をとる。「現象とは何ものかの現れであるから、現れてくる何かが存在するのでなければならない。それは実体である」。しかし彼によれば、現象および実体をこのように規定するのは「明白な論点先取の誤謬」であり、次のような奇妙な命題を導く。それは、「現象において現れるものとは、まさしく、それ自体としてはまったく現れず、またまったく現れることのできないものである」という命題である(以上、Renouvier [1897a, pp.380-1])。彼の考えでは、哲学的認識はあくまで「現象」の水準にとどまらなければならないのだ。

以上のように、ルヌヴィエの「新批判主義」がカント哲学との近さにもかかわらずカントを批判するのは、カントが「もの自体」という絶対的なものや、現象の世界を超えた「叡知界」を持ち込んでしまっているからである。ルヌヴィエにとって、これらは形而上学的

な「偶像」でしかない。以上が彼の「現象主義」のベースとなっている。

2 無限の観念の批判

無限の観念の批判はルヌヴィエ哲学の一つの特徴であるが、彼が無限の観念を批判するのは、絶対的なものに対する彼の批判的な態度と軌を一にしている。彼は、有限な人間に無限を認識することは原理上不可能であると考えている。したがって、永遠についても人間は無知なままにとどまる。たとえば彼は、次のように書いている。

「数字上の無限の真の定義とは、無限を、与えられた一つの数、したがって増大することのできる数であると同時に、指定することのできるあらゆる数よりも大きな一つの数である、と想定するような定義である。まさにこうした二重の観点を維持することが不可能である点にこそ、暴かれるべき矛盾が存在する」(Renouvier [1877, p.225, n.1], cité par Fedi [1998, p.198])。

同様に、無限小の観念についてもやはり人間は無知なままにとどまる。かくして、人間にとって厳密な意味での持続は認識不可能であり、せいぜい、継続・連続を語りえるのみである。

こうしたルヌヴィエの思想は、しばしば「有限主義」と形容される。すなわち、「無限」を形而上学的な独断と批判し、人間にとって到達可能なのは「無無限(indéfini)」であるととする。

どういうことか。ルヌヴィエは、「無限」という概念を量に関して用いることを批判する。というのも、「この[無限という]項は、現実的な諸表象の法則としては、矛盾なしに受け入れることがまったくできないからである」(Renouvier [1912a, p.230])。

ここでルヌヴィエが頼りとしているのは、矛盾律であり、この矛盾律は彼の思考法において非常に重要な役割を果たしている。ここでの彼のロジックは、次のようなものである。ここに無限の数列があると仮定する。それは奇数の系列と偶数の系列を含んでいる。定義上、両者はそれぞれに無限であるから、もともとの数列はそれぞれの系列の二倍となり、したがって無限

はそれ自身よりも大きいことになるが、これは矛盾である。したがって無限は存在しない。あるいは逆に、線分ABがあったとしよう。この線分が無限の部分からなると仮定する。その半分の数列は、やはり無限の部分を含んでいるだろう。だとすれば、線分の半分が線分全体と等しいことになるが、これは矛盾である。かくして、無限は存在しない。以上のような具合である。

彼に従えば、「可能な諸表象の法則としては、無限(*infini*)は無際限(*indéfini*)とは異ならない」。にもかかわらず「これら二つの語の差異は大きい」。すなわち、「無際限は、可能態(*puissance*)あるいは可能性(*possibilité*)と同一のカテゴリーに属している。数学的な無際限とは、可能なものとしての可能な数の列であり、この数列は、人が分割する一つの連続体の諸部分の列に対応している」。したがって、「法則は、より小さいものもより大きいものも指定可能であるような諸量の表象が、何らかの現実的な与えられた諸量の表象を伴うことから成り立っている」。そして、「指定可能なものというのは無際限であることから、それは一つの全体を形成することは決してないし、今後も形成することはないだろう」(以上、Renouvier [1912a, p.230])。一般に、人は「無限」という概念でもって、可能な数の系列を現実的に存在するものと見なしている。つまり「無限」を、一つの全体をなすような、現実化された集合と見なしているのだ。しかしルヌヴィエにとって、規定された量は有限でなければならず、指定可能なものの全体が指定されるということには矛盾がある。

無限に関するルヌヴィエの批判的な捉え方は一貫しており、後年の著作でも、彼は次のように論じている。すなわち、量に関して、無限の数というのが現実化されたものであるとするならば、それは一つの全体をなす数ということになり、したがって、それにさらに何らかの単位量を付け加えることができることになるが、これは矛盾しているのだ、と彼は結論づけている。

「現実態の無限(*l'infini actuel*)とは、現実化され、完成され、不変の一つの全体のことを意味するが、他方で、数が形成されるのは、諸単位を無際限に、終わりなく、つねに理念的には延長可能な仕方で行き加えていくことによってである。したがって

数の上での無限は、本来的に、現実化不可能なのである」(Renouvier [1897b, p.434])。

かくして「無限」の概念は、現実の次元からは遠ざけられなければならないのだ(5)。

「無限」に関する以上のようなルヌヴィエの立論は、「無限は可能的にのみ存在し、現実的には存在しない」とするアリストテレスの主張と同型のものである。よく知られているように、アリストテレスは『自然学』Ⅲ巻において、「無限なるものが活動実現態において(顕在的に)、しかも基本存在や始原的原理として存在することは明らかにありえない」(204a a21-22)と述べている。その理由は、無限なるものがそのような仕方では存在するとすれば、その無限なるものは分割不可能であるか無限に分割可能であるかのいずれかであることになるが、この場合に無限なるものは始原的原理なのであるから多数の無限なるものから構成されるということはある得ず、しかし無限なるものは何らかの量的なものである以上、分割不可能であることはあり得ない。したがって、活動現実態である無限というのはあり得ないことになる。アリストテレスによれば、無限なるものは、可能態において、負荷ないし引き去りをつづけていく過程という仕方では存在しないのだ(以上、アリストテレス [2017, p.138; p.151])。

さて、ルヌヴィエは無限を巡る議論において自らの根拠としている原則を「数の原理」または「数の法則」と呼んでいる。これは〈数のカテゴリーをあらゆる現象に適用する〉という原理のことを意味するとともに、さらに〈数とは規定された有限なものであり、現実的に量的な無限を拒否する〉ということをも意味している。たとえば彼は次のように説明している。「数における無限」というのを考えた場合に、それは「事実についてあるいは観念において定めることのできるあらゆる数よりも大きい一つの数」を意味するが、これは「思考に従って規定することがどのような仕方によっても不可能であるような数、それ自体が規定されない数、数ではないような数」である(cf. Renouvier [1912a, p.34])。つまり、量的な無限は数の原理に従えば矛盾するのだから、したがってそうしたものは存在しない(6)。

この観点からすれば、カントが『純粋理性批判』で述べていた4つのアンチノミーのうち、第一と第二の

アンチノミーについては、いずれも、テーゼは正しくアンチテーゼは誤りだ、ということになる。すなわち、第一アンチノミーのアンチテーゼとは、「世界は時間的な始まりをもたず、空間的に限界をもたない。すなわち世界は時間的にも空間的にも無限である」というものであったが、時間や空間を無限に辿るという発想は、ルヌヴィエによれば誤りである。まだ第二アンチノミーのアンチテーゼは、「世界におけるいかなる合成物も単純な部分からなるものではなく、また世界には、およそ単純なものはまったく存在しない」というものであるが、ルヌヴィエの見方からすれば、無限に分割可能な物体など存在しない、ということになるわけである。

3 表象とその関係的構造

これまで見てきたように、実体のような絶対的なもの、つまり、人間が原理上認識できないものを持ち込んでしまう考え方をルヌヴィエは厳しく批判している。彼は認識の対象となるものをすべて表象として捉え、これが関係的な構造をもつと考える。現象は表象から構成されており、認識において両者は同じものである。これらについて彼はどのような説明を与えているのだろうか。

ルヌヴィエはまず、思考の運動にとって本質的な二重の操作として、分析と総合を挙げる。感覚も概念も、意欲も情感も、あるいは人間や動物なども、すべてこの分析と総合の対象である。彼はこれらの対象をひとまとめにして「もの(choses)」と呼び、そのうえで、私たちの認識にとってあらゆる可能な「もの」について、「表象されている、現れているという一つの共通の特徴を持つ」(Renouvier [1912a, p.6])と述べる。私たちの認識の対象はすべて表象あるいは現われとして与えられるわけである。

彼は続いて、表象の定義を次のように記す。「何らかの仕方で切り離されあるいは合成され、またそれによって私たちがそれらについて考慮する、そのようなもの(choses)に対して関係づけられているものを、私は表象と名づける」(Renouvier [1912a, p.6])。

彼にとって、「もの」と表象は「トートロジー」の関係にある。そしてこれらが現象を構成している、とされる。つまりこれら3つはすべて、一体のものなのだ。

「私が説明してきたことに従って言えば、表象としてのもの、私はこれを事実あるいは現象と名づける。 / かくして私は、表象をものによって定義した後で、ものを表象によって定義することができた。この循環は避けがたい。これら二つの語、つまり表象とものは、最初は区別されているが、第三項すなわち現象において一体になっていく」(Renouvier [1912a, p.7])。

このように、表象はルヌヴィエの「現象主義」の核心をなす概念である。現象は表象として与えられ、この表象は関係的な構造をもつ。すなわちルヌヴィエによれば、表象は二つの項からなる。「あらゆる表象が想定している二つの要素、私はこれらを表象するもの *représentatif* と表象されたもの *représenté* と名づけることによって指し示すが、それらを定義するわけではない」(Renouvier [1912a, p.9])。ルヌヴィエは、これらの項は相関的であり不可分であって、両者を分離してしまうことはできない、として、両者を分離するような認識論を批判する。「表象するものは、多かれ少なかれ区別されている自己に対しての表象されたものであり、表象されたものは、その語が述べているように、それに対応する表象するものによってのみ理解される」(*ibid.*)。

そして、表象の関係的構造を構成する二つの項は「主体(sujet)」と「客体(objet)」である。ルヌヴィエは言う。

「別の言い方をしてみよう。客体と主体は認識にとって本質的である。認識が定める客体とは、通常、認識に従えば、現実存在するためには自らに対して表象されることを要しないような一つの主体である。そして、認識がそれ自身の基盤とみなしている主体とは、それにもかかわらずその客体として主体に提供されている。したがって、二つの項のそれぞれが、その相関物と何らかの仕方で一体化している。すなわち、客体は主体化し、主体は客体化しているのである」(Renouvier [1912a, p.9])。

ここで注意しておかなければならないのは、ここで

述べられている表象の关系的構造において、「主体」と「客体」のそれぞれが単独で認識されることはない、とされている点である。「認識は表象的なものを欠いた表象されたもの、表象されたものを欠いた表象的なものを、受容することはまったくない。まさに一つの表象において、認識は両者を受容するのであり、それ以外のところにおいては決してそうしない」(Renouvier [1912a, p.24])。ルヌヴィエはこのことを「表象はそれ自身以外の何ものも含まない」とも言い表している (*ibid.*)。

さらに、ルヌヴィエの思想において特徴的と言えるのは、表象の二つの項の不可分離性を、認識の構造上からなるいわば論理的な要請として捉えている点である。たとえばこの引用箇所の少し前のところで、彼は次のように書いている。

「切り離して捉えられた表象的なものと表象されたものは、表象不可能な存在物 (*irréprésentables entités*) であり、表象によってまた表象のうちで一つの意味を持つような关系的諸項であるが、これらの項は表象の外では誰ともかわりをもたない」(Renouvier [1912a, pp.23-24])。

表象の关系的構造を超えた、それ自体で存在する絶対的なものについては、表象という観点から次のように批判されている。

「もし、もの自体が、あらゆる表象とは独立に存在するとすれば、これらのものは私たちにとって未知であり、知にとって無であり、私たちにとって無である。結果として、知にとっては表象のみが存在する」(Renouvier [1912a, p.59])。

したがって、私たちが一般に「もの (*choses*)」と呼び慣らわしているもの、たとえば自然界に存在するような事物は、私たちが表象としてそれを認識するからこそ存在物という資格を与えられるのであり、それが最初から、私たちの表象を超えた仕方ですれ自体として存在する何かを意味するということはない。

「客体的あるいは主体的な形態のもので、表象しあるいは表象されるものとしてのもの

(*choses*) について私たちは語っている (私たちは何について語っていたのか?) か、あるいは、まったく異なる関係を有しているか、あるいはいかなる関係ももたないようなもの (*choses*) について私たちは語っているのか。しかし、表象しあるいは表象される限りで、ものは表象と混然一体となっている。ものがまったく異なる関係を有するかあるいはいかなる関係ももたないかぎり、ものは現れることがなく、存在しないものとして存在する。したがって、ものは認識に関しては表象であり、表象はものなのである」(Renouvier [1912a, p.60])。

私たちにとって現れるものはすべて表象として捉えられ、認識はこれによって構成されとする彼の立場においては、私たちの認識を超える絶対的なものの類はすべて批判されなければならない。この意味において、私たちにとって実在すると言えるのは現象のみである (7)。そして、現象が表象の关系的構造のもとに与えられるという点において、現象はつねに合成されたものである (cf. Renouvier [1912a, pp.65-66])。

したがって、ルヌヴィエの考えに従うならば、現象が、実体のような絶対的なもの、つまり、現象を超えた何らかの超越的存在から構成されていると考えるのは、いわば転倒ないし倒錯だということになる。

「すべての関係は諸項を含んでおり、そのことから、まったく関係的ではない何らかのものを含んでいる、と反論してはならない。まったく逆であり、諸項が理解可能なのはそれらの関係においてのみなのだ。そして、关系的なものが絶対的なものを前提しており、それを証拠立てていると言ってはならない。というのも、絶対的なものそのものが、关系的なものの相関項でしかないからだ」(Renouvier [1912a, pp.70-71])。

ところでルヌヴィエが「关系的 (*relatif*)」というとき、表象の关系的構造というだけでなく、諸現象間の関係のことを意味することがある。彼はある箇所で、「分析が何らかの一つの全体のうちに発見するそれぞれの要素にも現象の名を与える」と述べているが、これは現象がその様態において多様であり、それぞれ

が、互いに切り離されることなしに区別されるような諸現象と呼ばれるとしている。このことから彼は、「現象は他の諸現象に対して関係的である」(Renouvier [1912a, p.66])と書いている。ある現象が別の諸現象と合成されるということがあり得るのであって、現象はそれ自体が他の諸現象との関係において成り立っているのだ(8)。

つまり、ルヌヴィエにおいて表象が関係的な構造をもつということは、表象が二つの相関項からなる、というだけでなく、表象そのものが他の諸表象との関係の網の目のなかに位置づけられており、総合されたり分析されたりしている、ということをも意味している。このことは、何らかの絶対的なもの、つまり、それ以上の分析を拒むようなものを想定するわけではない、という彼の基本的な考え方ともつながっている。

「結論を述べよう。諸現象は単純であり、また合成されたものである。しかしそれは、お互いに対する関係において、ということである。諸現象は相互に包含したり包含されたりしながら、ある順序に従って連鎖し、繰り広げられる。何ものも、総合によってのみ私たちに与えられる。何ものも、分析によってのみ私たちに解明される。さらに結論を述べよう。すべては認識に対して関係的(relatif)なのである」(Renouvier [1912a, p.71])(9)。

4 カテゴリー

さて、私たちの認識が表象の関係的構造において成り立っているというとき、ルヌヴィエは同時に、その関係がいくつかのカテゴリーに従って与えられるのだと規定している。そしてこのカテゴリーは、彼の現象主義においてもっとも特徴的な概念である。そこで本節では、彼のいうカテゴリーがどのようなものか、正確に理解するように努めよう。

言うまでもなく、彼が示しているカテゴリーの概念はカントのそれを踏まえているのだが、さらに、ルヌヴィエ独自の解釈が加えられている。彼によるカテゴリーの定義は以下のようなものである。

「諸カテゴリーは、認識の原初的かつ還元不可能な諸法則であり、認識の形式を規定し認識

の運動を統御している根本的な諸関係である」(Renouvier [1912a, p.119])。

カテゴリーは私たちの経験においてその形式として、それ自体は経験に先立っているものとして与えられる。カテゴリーは経験の実質をなすものではなく、それ自体は経験の対象とはならないが、それでもつねに、経験において、認識を統御する、固有の普遍性を備えたものとして与えられるのだ。

「一つの実際の表象のなかで与えられるものとして、諸カテゴリーは経験の手の届くところにある。諸カテゴリーは個別的なものであり、このことから諸カテゴリーは繰り返され、人間は一致してそれらを指し、またそれらを一般的なものとして指し示す。この意味において、現象が、ある精神または他のいくつかの精神のなかでどの程度繰り返され確認されているのかは重要ではない。諸カテゴリーに固有の普遍性とは以下の点に存する。それが顕現するために必ずや経験の諸条件を通過するのだが、諸カテゴリーは経験よりも上位にあつて、経験を包み込み、経験を導いて経験に諸規則を課すのに適するものとして現れるのだ。私たちは諸カテゴリーを、経験の無際限の発展によって恒常的に立証されることを予期している。そして、諸カテゴリーが包括するのに適している諸関係の集合は、私たちにとって、一連の可能な経験を合成している」(Renouvier [1912a, p.119])。

この引用箇所では、諸カテゴリーは個別的なものとされており、私たちの様々な経験においてその都度確認されるものであるが、決して経験から帰納的に導き出されるものではないこと、そしてそれらは、私たちの可能な経験において立証されるであろうようなものとして与えられることが言われている。

続いて彼が挙げているカテゴリーは、「関係」「数」「位置」「継起」「質」「生成」「因果性」「目的性」「人格性」の9つである。(彼が挙げるカテゴリーについては、時期によって多少のバリエーションがあるが、本論ではRenouvier (1912a)に準拠する。)それぞれのカテゴリーが3つの形態(テーゼ/アンチテーゼ/

ジンテーゼ)をとるものとされており、それを一覧表にすると、カテゴリーは以下のようになる。

1. 「関係」：「区別」/「同一」/「規定」
2. 「数」：「一性」/「多数性」/「全体性」
3. 「位置」：「点」/「空間」/「延長」
4. 「継起」：「瞬間」/「時間」/「持続」
5. 「質」：「差異」/「類」/「種」
6. 「生成」：「関係」/「非関係」/「変化」
7. 「因果性」：「現勢」/「潜勢」/「力」
8. 「目的性」：「状態」/「傾向」/「情念」
9. 「人格性」：「自己」/「非自己」/「意識」

この中で「関係」のカテゴリーが第一のものとされているのは、「関係」がもっとも一般的な法則であり、可能な諸法則というのはそれが多様化したものだからである。

「私は、もっとも一般的な法則とは関係そのものであり、あらゆる可能な法則は、実際、そこから多様化したものでしかない。と述べた。関係はしたがって、諸カテゴリーのうちの最初のものであり、我々は、そのカテゴリーにもっとも普遍的な形で属しているもの、すなわち、他の根本的な諸法則が共有しているものを、認識しなければならない」(Renouvier [1912a, p.120])。

彼は他の箇所でも、「関係」を「諸カテゴリーのカテゴリー」とも呼んでいる(Renouvier [1912a, p.147])。この点に関して彼の説明は必ずしも分かりやすいものではないが、私たちの認識の対象たる諸表象が関係的構造をなしており、現象はそれ自体が合成物であり他の諸現象との関係のなかにあるという点から考えるならば、あらゆる認識は必ずや一定の「関係」のもとにあるということは間違いない。そして他の諸カテゴリーがつねに複数の現象ないし項の「関係」のもとに成り立っていることは、カテゴリーの一覧表を見れば容易に理解されることである。

また、この一覧表では「目的性」「人格性」というカテゴリーが設けられているのが目を引くが、これは、「目的」が生成や原因と結びついていて欲求・欲望・情念といった情感的諸関係がこのカテゴリーのもとで

現れてくるからであり、また現象の主体について考えた場合に、何らかの関係が表象としてどのような現象と結びついているかを考えるならば、それは意識あるいは「人格性」だからである(cf. Renouvier [1912a, pp.122-123])。

このようにルヌヴィエによれば、諸カテゴリーは、表象において与えられるものであるが、表象に由来するものではなく、あらゆる経験においてその経験を統御するものとして恒常的に見出され、また先の引用箇所にあったように、これからも経験を通じて引き続き立証されていくであろうようなものとして与えられるのである。

少し後のところで、ルヌヴィエはさらに次のように書いている。

「諸現象の一般的な諸関係の体系を構築すること、諸関係がその主要な輪郭を規定している建造物を築くこと(…)、これは学問の一般的な問題である。諸関係と諸法則は、認識の唯一の対象である。それらは表象においてのみ与えられる。表象そのものは、それが経験である限りで、それが検証するが与えることはない諸法則によって統御される。したがって、表象の一般的な諸法則は、学問の建築物が用いなければならない最初の諸要素である。要求される建造物のプランは、私たちがカテゴリーと呼んでいる一般的な諸関係の調和した集合から生じる」(Renouvier [1912a, p.123-124])。

この箇所では、経験である限りでの表象が諸法則によって統御されること、また表象は諸法則を「検証するが与えることはない」、つまり表象から諸法則が帰納的に導き出されるわけではないことが示唆されている。

「法則」は現象を超えたところにあるわけではないものの、あらゆる現象においてつねに妥当するようなもの、経験が必然的にそれに従わなければならないようなアプリアリな「法則」であり、「認識の原初的かつ還元不可能な諸法則」である。ルヌヴィエはこれをカテゴリーと呼んでいる。したがって、カテゴリーは表象や経験の実質を与えるものではない。

「実際、意識の行使の最初の瞬間において、もっ

とも多様な諸関係はすでにそこにある。もっとも単純な現象もそのような諸関係を前提としており、分析が識別する諸要素の総合は先行して存在しているのだ。実際、同様に、諸能力と諸カテゴリーは、もし感性と経験がその実質を提供しないならば、空虚である。経験が意識とその諸形態にとって欠かせないものであることを確認するのはまさに経験そのものである。かくして、諸カテゴリーは個別の感性的な諸現象をまったく与えることがなく、またそのような諸現象も、それがいかなる数のものであれ、それらのすべてを統御する一般的な諸法則を構成することはない」(Renouvier [1912b : p.182])。

では、ルヌヴィエの示している一連のカテゴリーのアプリオリ性はどのようにして確保されているのだろうか。

よく知られているように、カントが『純粋理性批判』のなかで12のカテゴリーからなるカテゴリー表を提示した際に、彼が導きの糸としたのはいわゆる「判断表」であった。カントの語彙を用いるならば、感性が直観の能力であったのに対して、悟性は概念の能力であり、これは具体的に言えば、概念を判断の述語として用いる能力、言い換えれば判断の能力であった。このことから、悟性が判断する仕方つまり判断形式のリストを参照することによって、カテゴリーを網羅的に発見することができるのだ、と説明されていた。こうしたロジックがカントにおいて、カテゴリーのアプリオリ性を保証してくれていたのである。

しかしルヌヴィエはカントのカテゴリー表を、「彼の分類は人工的であり恣意的である」(Renouvier [1912a, p.133])と一蹴している。彼はカントが規定している判断の可能な諸形式について言う。

「彼がこれらの形式について行った枚举が正確であり、反復も抜け落ちもなく、欠陥のある解釈でもない、と誰が彼に確認してくれるというのか。これらの同じ諸形式が諸カテゴリーの一つ一つを与え、そのうちのいくつかを前提としてはいない、と誰が彼に言うのか」(Renouvier [1912a, p.133])。

カントが『純粋理性批判』においてカテゴリー表を作成したのは、経験的なものを排除してアプリオリなもののみを抽出する点に狙いがあった。だからこそカントは、悟性を判断の能力と見定め、あらゆる判断は私たちの表象を統一する機能であると規定したうえで、悟性の判断の形式に注目し、判断の様式を分類することを通してカテゴリー表にたどり着いたのであった。

これに対してルヌヴィエの考えでは、私たちが諸カテゴリーを認識することができるのは、あくまで経験を通してのことである。

「私は諸カテゴリーに、経験的に到達する。私はそれらを仮定的に定める。そして私はそれらを、検証されるようにするために提示する。もっとも決然としたアプリオリは、この場合、経験的な一つの体系の所与と一体となっており、それに先立つ可能な統御はなされていない。認識の必然的で普遍的な諸テーゼは、分析がその領野を記述し、その射程を認めるよりも前に検証されたり確認されたりすることができない。しかしながら、あらゆる分析はそれらのテーゼを前提としているのだ。それらは、私たちが何らかの概念を形成したり獲得したりするその手法のなかに入り込んでいる。もしも私たちがそれらを何らかの方法によって獲得したり分類したりすると主張したとすれば、その方法の方法をどこで見つけ出すというのだろうか」(Renouvier [1912c, p.2])。

この引用箇所では、カテゴリーはあくまで仮定のものであり、検証されたり確認されたりする、と言われている。だとすればルヌヴィエのいうカテゴリーは、私たちが「何らかの概念を形成したり獲得したりするその手法」において〈その都度つねに機能しているのが見いだされる〉という意味においてアプリオリなものである、ということになるだろう。

ルヌヴィエは少し後のところで、次のように書いている。

「【関係、数、位置、契機、質、生成、因果性、目的性、人格性のうち】最初の5つのカテゴリーのいずれかが除かれれば、表象されたものは何も存続しない。つまり、実際、一つのものは他のもの

との関係によって規定されなくなる。ものは何らかの全体の部分、あるいは何らかの諸部分の全体といった、数を含まないことになる。ものは直接的にも間接的にも、いかなる場所ももたず、いかなる時代にも関係づけられなくなる。最後に、ものを何らかの類のもとに分類することでそれを質的に定めることができなくなる。このものは存在することをやめる、あるいはむしろ、このものは私たちにとって決して存在しなかったのだ。他の諸カテゴリー、つまり『生成』『因果性』『目的性』『人格性』は、私たちが自らに表象する際のあらゆる主体に、つねにかつ直接的な仕方でも適用されるわけではない。しかしそれらのカテゴリーが内属していないような表象的、対象的な機能は存在しない。何であれ諸事実や諸現象を自らに表象する場合、しかしそれは反省と体系によってそうするのだが、私たちはそれらを私たちのうちにある人格性に関係づけ、私たちの人格の一連の変化を枚挙し、原因である意志を行使し、それに対して期待される諸目的を私たちに示すのでなければならぬ」(Renouvier [1912c, p.2]. カッコ【】内は引用者による補足)。

この引用箇所では「それらのカテゴリーが内属していないような表象的、対象的な機能は存在しない」と記されているように、カテゴリーを介することがなければ、私たちはいかなる表象ももつことがなく、したがっていかなるものについても「このものは私たちにとって決して存在しなかった」ことになってしまう、というのである。まさにこの点が、諸カテゴリーのアプリオリ性を保証する根拠となっているわけである。ただし先の引用箇所からも分かるように、これらのカテゴリーは無条件で措定されるようなものではなく、つねに経験を通じて検証され、その働きが確認されなければならない、そのような性質のものである。

さて、ルヌヴィエが挙げている諸カテゴリーのなかで、「人格性」のカテゴリーは彼のカテゴリー論を特徴づける要素となっているとともに、晩年の「人格主義」の立場につながるという点でも非常に重要なので、もう少し詳しく見てみよう。

ルヌヴィエにおいては、カントの「統覚」に関する議論は引き継がれておらず、したがってカントのよう

に「直観における多様なものをまとめあげる働き」なるものが要請されることはない。ただし「人格性」のカテゴリーは、表象の関係的構造の場となる「意識」を統御するものとして、他のカテゴリーを最終的にまとめ上げる役割を果たすものとされている。つまり、様々な表象を一つの集合として束ねる働きをしているのは、この「人格性」のカテゴリーなのである。この点に関して、彼は次のように書いている。

「何らかの関係が表象的にその一部をなしているのは諸現象のどのような集合に対してか、とつねに問うことができる。この問いへの答えは、意識のあるいは人格性の法則(…)である。この最後のカテゴリーは他のすべてのカテゴリーを包括し、とりわけ、それを人間の観点から行う」(Renouvier [1912a, p.123])。

ところで先に示したように、「人格性」のカテゴリーもまた関係的構造を備えており、それは「自己」「非自己」「意識」という三つの形態をとるのだが、この「意識」とはデカルトのコギトのように単独で存在する実体ないし自我のようなものを意味するものではなく、「自己」と「非自己」はつねに関係的構造をなしておりどちらか一方がそれ自身のみで与えられるということはない。ルヌヴィエの説明によれば、「自己」とは一つの「極限」であり、「非自己」はこの「極限」によって制約される「間隙」、すなわち、あらゆる他の集合の無際限で無規定な集合である。「自己」と「非自己」との総合が「意識」であり「人格」である。「自己」と「非自己」はこの総合において、その関係においてのみ与えられ、したがってこの所与は同時に二つの項の区別であり同一化である(cf. Renouvier [1912b, p.178])。

ルヌヴィエは「自我(le moi)」なるものを単独で措定するような考え方を批判し、認識の対象はあくまでも表象であって、それは関係的構造のもとにおいてのみ成立することを強調している。「私が措定するのは表象であり、表象以外の何ものでもない。私は自我のうちに表象を措定しない。というのも、それはすでに別のものを措定することになるであろうが、それは何なのだろうか。自我とは何なのか？ それは諸表象から構成された一つの主体なのだろうか？」

(Renouvier [1912a, p.16])。したがって「自我」が認識されるのであれば、「表象されたもの」として与えられるのでなければならない。そして彼の考えでは、感覚や概念などの表象や、物質的および器質的な諸表象が結び合わされた場合に、その全体が「自我」と呼ばれるのであって、つまり「自我」とはそうした表象の構成物のことである (cf. *ibid.*)。

他方で彼は、あらゆるカテゴリーは意識にその中心を見出す、とも述べている。すなわち、世界は諸表象の集合であって、それらを統御している諸法則は結局のところ意識において統合される。このことから、あらゆる法則やカテゴリーの最終的な基盤をなすのが「人格性」のカテゴリーだ、とされるのである。

5 ロック批判

よく知られているように、イギリス観念論の祖であるジョン・ロックの経験論は生得観念の批判をその最大の特徴の一つとしており、デカルトが生得的観念として持ち込んだ実体の観念を批判している。こうした発想はルヌヴィエとの近さを感じさせる。しかし彼はロックの哲学にそれほど高い評価を与えておらず、方法、原理、統一性を欠いていると見なしている (Renouvier [1842, p.521])。この点は、彼の「現象主義」の一つの特徴をよく表している。

ルヌヴィエがロックを批判する際の一つの典型的な語り口は次のようなものである。

「ロックの偉大な著作は、多数の事例について、私たちが諸感官によっていくつかの個別の事物をいかにして把握するか、またこれらの事物が、それらを包括している一般諸観念を帰納によって形成するために必要であるのはいかにしてか、こうしたことを示す以外の目的を持っていない。そこで私たちには、彼が私たちに、この帰納が、個別の認識以外のものを含むことなしに実行されることがいかにして可能なのかを示してくれるように要求する権利がある。もし彼がそれをやり遂げないというのであれば、私たちには、方法において一つの矛盾があることを指摘する権利がある。というのも彼は、一般諸観念が個別の諸観念の内にあるのを理解するよう自らに課した後で、彼は反

対に、個別の諸観念を一般的諸観念のもとにひとまとめにするのを余儀なくされているからである」(Renouvier [1842, pp.523-524])。

ルヌヴィエはさらにこの後で、ロックが諸観念の起源をもっぱら感覚に還元しておきながら、感覚に関してそれを働かせたり変容させたりするもう一つの能力を想定している点で矛盾があること、また、ロックにおいて諸感官は、その所与に適用される知性が現れる上で必要であり、諸感官はまったくそのために存在するのだということを認めるよう要求している点で論点先取りがあることを指摘している (*ibid.*)。このことを言い換えるならば、人間の認識は、完全に感覚のみに由来するもの (ロックの場合は諸観念) のみから説明することはできず、帰納によって一般諸観念を形成するとしても、そこに「還元不能な」法則やカテゴリーが介在していなければならない、ということである。これを言い換えるならば、法則やカテゴリーといったアプリアリなものを欠いた経験論は、人間の認識のはたらきの解明として不十分だ、ということである。こうしたルヌヴィエの発想は、「人間のあらゆる知識は我々の経験に由来する」というロックのテーゼに「ただし知性そのものを除いて」とライプニッツが付け加えたことを思い起こさせるであろうし、ルヌヴィエ自身もいくつかの著作においてライプニッツのこの言葉をたびたび引用してもいる。こうしたロックに対する指摘が妥当なものであるかはさておき、ルヌヴィエがロックに対して様々な箇所で行っている言及はいずれもかなり厳しいものである。

このように、ルヌヴィエの現象主義はいくつかの重要な点で、経験論とは一線を画しているといえることができる。すなわち、本論で検討してきたように、ルヌヴィエの現象主義においては、諸現象は彼の言う「認識の原初的かつ還元不可能な諸法則」たる「カテゴリー」に従うことが想定されており、この点が彼の現象主義の最大の特徴となっているのだ。

6 終わりに

本論ではこれまで、ルヌヴィエの「批判主義」をめぐって、「現象主義」という観点からその核心となる主張を明らかにしてきた。しかし、紙幅の制限により

取り上げることのできなかった論点は多く残されている。本論の締めくくりとして、2点、今後の課題として指摘しておきたい。

ルヌヴィエのいう「現象主義」においては、実体などの絶対的なものが批判されていた。確かに、有限な存在である人間に備わる認識の構造から考えるならば、彼の言うように、そのような絶対的なものが批判されるのには一定の妥当性がある。また、彼は認識の客観性を、法則・原理のアプリオリ性によって保障されるものと考えていたように思われ、これもまた一つの立場ではあろう。しかし、彼の立論は、観念論とまではいかなくとも、結局のところ主知主義のバリエーションでしかないのではないかと、という問題はつねに付きまとう。この点は、確実性に関する彼の議論のなかにはっきりと表れている。彼はその著作の様々な箇所で、確実性が「信 (croyance)」に過ぎないことを繰り返し述べている。絶対的なものを持ち込むことを批判する彼の立場からすれば、こうした主張となることもうなずけることではあるが、決定論から解放された人間の自由を確信し、自由の立場から首尾一貫した理論体系を構築しようとするとき、彼の立論には一定の危うさがつきまとうことになる。たとえば、彼は次のように書いている。

「したがって、確実性は絶対的なものではないし、そうしたものではありません。確実性とは、あまりに忘れられがちなことであるが、人間の状態であり働きなのである。これは、人間が、無媒介に存在しえないもの、つまり実際の経験にとって外的または上位の事実や法則を、無媒介に把握するような働きや状態ということではなく、人間が、あるがままの、自らがそれを保っているような意識を措定する、そうした働きや状態ということである。厳密に言うなら、確実性は存在しない。確信している人間だけが存在するのだ」(Renouvier [1912c, p.366])。

かくして、自由および意志に関するルヌヴィエの議論を、彼の認識論と整合的に理解するためには、まだまだ検討すべきことが数多く残されている。

さらに、ルヌヴィエの哲学には固有の意味での存在論が占めるべき位置があり得るのかという点も、検

討されるべき重要な問題である。「存在」に関しては、彼は繫辞としての「存在する / である (être)」について詳細に分析しており、たとえば「法則のない存在、存在のない法則は意味を欠いた言葉である」(Renouvier [1912a, p.89]) や、「類的な意味における存在とは関係の通俗的な名称であり、それが現象の名称でもあるとすれば、それは関係抜き現象も、現象抜き関係も存在しないからである」(Renouvier [1912a, p.92])、あるいは「私は単純に、諸存在とは、規定された諸機能によって結び付けられた諸現象の諸集合であると言おう」(*ibid.*) といった言葉を記してもいるのだが、〈存在とは何か〉あるいは〈存在するとはどういうことか〉という根本的な問いに対する議論は乏しい。彼は晩年の著作である『人格主義』において、さらに次のように書いてさえいるのだ。「あらゆる哲学とは独立に、信 (croyance) はものの現実的存在を措定する。現実的、というのは、そうしたものの固有の本性の問いを立てることなしに考えた場合、ということである。信はまさにそうしたことのみから、外的自然の現実性を確証する」(Renouvier [1903, p.13])。ルヌヴィエの晩年の思想については扱いがやや難しい面もあるが、現象主義という立場をとる点では一貫しており、現象主義の枠組みにおいて現象を超え出ものの存在を(観念論に陥ることを回避しつつ)どのように論じることができるのか、というのはかなり重大な点である(10)。

ルヌヴィエの「新批判主義」は独特の体系性を備えており、かつ、彼が著作の中で取り上げているテーマは多岐に渡るため、論じなければならないテーマは数多く残されており、そのために彼の膨大な著作群を検討することは骨の折れることではある。しかし、とりわけ上で指摘した2点は、彼の議論がどの程度の首尾一貫性を備えているのか、またどの程度の現代的意義を有するのかを見定める試金石となるはずである。それらの問いの解明を今後の課題としたい。

【文献】

- アリストテレス (2017) . 『自然学』、『アリストテレス全集4』、内山勝利訳、岩波書店。
Fedi, Laurent (1998) . *Le problème de la connaissance dans la philosophie de Charles Rnouvier*, Paris: L'Harmattan.

- 合田正人 (2020) . 『『死せる哲学者』ルヌヴィエのラビリントス——ルヌヴィエとジャンケレヴィッチ再考へ——』、『フランス哲学・思想研究 25』、日仏哲学会、pp. 3-13.
- Janssens, Edgard (1904) . *Le néo-criticisme de Charles Renouvier. Théorie de la connaissance et de la certitude*, Paris: Alcan.
- 北垣徹 (2005) . 「道徳の在処を求めて——19世紀フランス社会思想の探求 (一)」、『西南学院大学フランス語フランス文学論集 46』、西南学院大学学術研究所、pp.33-63.
- メナンド、ルイ (2021) . 『メタフィジカル・クラブ 米国100年の精神史』、野口良平/那須耕介/石井素子訳、みすず書房.
- Milaud, Gaston (1927) . *La philosophie de Charles Renouvier*, Paris: Vrin.
- ラヴェッソン、フェリックス (2017) . 『十九世紀フランス哲学』、杉山直樹/村松正隆訳、知泉書館.
- Renouvier, Charles (1842) . *Manuel de philosophie moderne*, vol.1, Paris: Paulin.
- Renouvier, Charles (1877) . « Note sur l'infini de quantité », dans *La critique philosophique. Politique, scientifique, littéraire*, treizième année, vol.1, pp.225-227.
- Renouvier, Charles (1884) . « Le double sens du terme de *Phénoménisme* », dans *La critique philosophique. Politique, scientifique, littéraire*, treizième année, vol.2, pp.129-137.
- Renouvier, Charles (1897a) . *Philosophie analytique de l'histoire. Les idées, les religions, les systems*, t.III, Paris: ed. Ernest Leroux.
- Renouvier, Charles (1897b) . *Philosophie analytique de l'histoire. Les idées, les religions, les systems*, t.IV, Paris: ed. Ernest Leroux.
- Renouvier, Charles (1903) . *Personnalisme*, Paris: Félix Alcan.
- Renouvier, Charles (1906) . *Critique de la doctrine de Kant*, Paris: Félix Alcan.
- Renouvier, Charles (1912a) . *Essais de critique générale, Premier essai. Traité de logique générale et de logique formelle*, t.I, Paris: Armand Colin.
- Renouvier, Charles (1912b) . *Essais de critique générale, Premier essai. Traité de logique générale et de logique formelle*, t.II, Paris: Armand Colin.
- Renouvier, Charles (1912c) . *Essai de critique générale, Deuxième Essai. Traité de psychologie rationnelle*, Paris: Armand Colin.
- Séaille, Gabriel (1905) . *La philosophie de Charles Renouvier. Introduction à l'étude du néo-criticisme*, Paris : Alcan.
- 田中拓道 (2006) . 『貧困と共和国 社会的連帯の誕生』、人文書院.
- 山根秀介 (2020) . 「シャルル・ルヌヴィエの反カント主義とウィリアム・ジェイムズ」、『フランス哲学・思想研究 25』、日仏哲学会、pp.14-26.

【注】

- (1) ジェイムズが1870年4月30日の日記に記しているところによれば、1869年、彼はハーヴァード大学で医学博士号を取得した後、不快抑うつ状態に落ち込み、眼疾などの病気で悪化していたが、1870年の春になって、ルヌヴィエの『一般批判試論』の第二巻を読んだことで危機を脱した (cf. メナンド [2021, pp.210-220])。なお、ルヌヴィエがジェイムズに与えた思想的

な影響を論じた近年の邦語文献としては、合田 (2000)、山根 (2000) などがある。

- (2) cf. 田中拓道 [2006, pp.189-207].
- (3) 「実証的諸科学の進歩、そして、決定論を普遍化することによってそれらの方法を心理学や道徳諸学に適用すること、これらのことによって哲学者【ルヌヴィエのこと】は、人間の自由を救い出すために、偶然性を普遍化するように促された」 (Séaille [1905, p. 1])。
- (4) 以上の点を、セアイユは次のようにまとめている。「ルヌヴィエは現象主義者であるとするれば、彼は、まったく経験論者であろうとはしていない。彼が法則について作り上げている観念は、彼をカントに近づけている。もっとも単純な知覚が、カテゴリー的かつ形式的な要素を包含しており、法則はアプリアリであって、法則が統御している諸事実に対して論理的に外的である」 (Séaille [1905, p.39])。
- (5) ルヌヴィエのこのようなロジックに対して、セアイユは、そこには「あらゆる所与は数である」という前提があり、ルヌヴィエは現実的な無限の批判と矛盾律との間にアプリアリな結びつきを想定している、という趣旨の批判を展開している (cf. Séaille [1905, pp. 69-79])。私たちに与えられるのは現象のみであり、私たちが認識するのは表象である、というのが本当であるとしても、把握できない数の項から構成された集合というのが私たちの思考の枠の外に出て行ってしまうわけではない、というわけである。ルヌヴィエにおける無限概念の解釈の妥当性に関しては、19世紀半ばにこの概念をめぐってどのような議論がなされていたかを確認する必要があるためここで展開することはできないが (この点については例えば Fedi [1998, pp. 191-214; pp.260-273] を参照)、ルヌヴィエの哲学の根本原理に触れる問題であることは確かである。
- (6) ミローはルヌヴィエの「数の法則」を、以下のように簡潔にまとめている。それは、「具体的な現実が、何であれものを数える機会を私たちに与えるすべての回数は、ものというものが数において無限となることはありえない——それは矛盾となるであろう——ことから、必然的に数において有限である」 (Milaud [1927, p.55]) というものである。
- (7) 本論でも繰り返し述べる通り、ルヌヴィエはカントが「もの自体」や「叡知界」といったもの

を持ち出している点を形而上学的だと一貫して批判するのだが、その批判の特徴として、そのようなものを前提とすることは自己矛盾に陥る、という形を取っている点を指摘することができる。たとえば彼の没後に刊行された『カントの学説の批判』には、次のような文言が見出される。「カントが避けることのなかった曖昧さは、あらゆる絶対主義的な実体主義に固有のものである。というのも、この学説の信奉者たちは、実体を定義するのに、様々な属性や質を捨象していき、それ自体として質を欠いた仕方^で絶対的に存在するであろうようなものにしかたどり着くことがなかったので、実体を、何らの現象的な規定を受ける傾向があるにもかかわらず、あらゆる現象的な規定にとってそれ自体として適さないようなものとして措定せざるをえなかった。そして彼らは、何らかのもの、実体が、現象的な外観において現れると述べるときに、何らかのものは、その本性によって、現れることがまったく不可能であると想定するように導かれることとなっているのである」(Renouvier [1906, p.364])。

- (8) セアイユはこうした点にも、ルヌヴィエと経験論者との違いを見出している。「ルヌヴィエの哲学を特徴づけているのは、彼の現象論が純然たる経験論ではないということである。彼は現象しか認識しないことによって、秩序、諸法則の総体を、他の現象を包含しそれを支配している一般的な現象として認める。経験論者はあらゆる関係を、その関係が結び付けている諸項に分解する。これが、彼らのあらゆる当惑の原理である。関係は諸現象、純粋な出来事、偶発的な出会いに後続するものではない。関係は諸現象と同様に存在する。関係はそれらに論理的に先行している。というのも、関係は、諸現象がそれに従って現れることのできる、そうした諸条件を措定するからである」(Séaille [1905, p.89])。
- (9) ルヌヴィエの現象主義においては、私たちに与

えられるものはすべて表象であり、それは関係的構造をもつ。そして本論で後から見るように、彼は意識をもこの関係的構造のなかに位置づけている。彼が別のところで次のように書いているのも、まさにこの観点から理解されなければならない。「世界とは、何らかの意識のもとで可能な経験の対象たる諸現象の総合である。(…)したがって世界は、何らかの表象——客観的であれ主観的であれ、現在のものであれ過去のものであれ、あるいは未来のものであれ——を構成しているあらゆる関係の総体であり、この表象と、外部のもの、先行するもの、後続するものとはまったく区別されることがないのであって、これは、内在的に措定された諸部分の区別がどのようなものであれ、そうなのである」(Renouvier, Charles [1912b, p.204])。

- (10) この点に関して、ルヌヴィエが晩年に「新しいモナドロジー」や「予定調和」について積極的に論じ、さらには「人格主義」を提唱してたとえば「創造的な第一の人格」等々に関する議論を展開するようになったことを踏まえて、彼の現象主義がある種の形而上学ないし独断論に陥ったという指摘がなされることがある。たとえばラヴェッソンは次のように書いている。「しかしながら、ルヌヴィエはその『試論』【『一般批判試論』のこと】第一部では「現象主義」ないし「表象主義」と呼べる立場を採ってはいたものの、それ以降の箇所では形而上学者の考えからそれほど遠くない思想へと回帰していると見られるのも事実である」(ラヴェッソン [2017, p.144])。あるいは他に、次のような指摘もある。「ルヌヴィエの現象主義は、その著者は気づかなかったように思われるが、デカルト的伝統へと回帰していく運動によって、独断論へと展開していった」(Janssens [1904, p.113])。彼の哲学が示した晩年の展開がどの程度の必然性があったのかという点については、今後、丁寧に跡づけていく必要があるだろう。

(令和7年1月14日受理)

On phenomenalism of Charles Renouvier

* KAWASAKI Soichi

Abstract :

The purpose of this essay is to clarify the framework and logic of the argument developed by Charles Renouvier, 19th century French philosopher, under the concept of "phenomenalism".

Phenomenalism aims to "reduce cognition to the laws of phenomena". These "laws of phenomena" are a priori laws in Kantian sense, found with experience but prior to experience. Renouvier also uses the term "laws" in this sense as "categories," and these "categories" are the concepts that characterize his philosophy.

Renouvier consistently criticizes the "absolute" that transcends our perception, and harshly criticizes concepts such as substance and infinity as metaphysical. He sees everything recognizable as a "representation" which has a relational structure. This "representation" is the key concept of his "phenomenalism". He stipulates that phenomena have a relational structure of "representation" and are given to us according to several "categories".

Key Words : Renouvier, New-criticism, Representation, Category.

* Department of School Subject Content Education, Division of Humanities and Social Sciences, Philosophy

